

# 少年

谷崎潤一郎

青空文庫



もう彼れ此れ二十年ばかりも前になろう。漸く私が十ぐらいで、  
蠮かきがら殼町二丁目の家から水天宮裏の有馬学校へ通つて居た時分――  
――人形町通りの空が霞んで、軒並の商あきうどや家の紺暖簾こんのれんにほか  
くと日があたつて、取り止めのない夢のような幼心にも何とな  
く春が感じられる陽気な時候の頃であつた。

或るうらくくと晴れた日の事、眠くなるような午後の授業が済ん  
で墨だらけの手に算盤そろばんを抱えながら学校の門を出ようとすると、  
「萩原の栄ちゃん」

と、私の名を呼んで後うしろからばたくと追いかけて来た者がある。

其の子は同級の塙信一はなわと云つて入学した当時から尋常四年の今日

まで附添人の女中を片時も側から離した事のない評判の意気地なし、誰も彼も弱虫だの泣き虫だのと悪口をきいて遊び相手になる者のない坊ちゃんであった。

「何か用かい」

珍らしくも信一から声をかけられたのを不思議に思つて私は其の子と附添の女中の顔をしげくと見守つた。

「今日あたしの家へ来て一緒に遊ぶな。家のお庭でお稲荷様のお祭があるんだから」

緋の打ち紐で括つたような口から、優しい、おずくした声で云つて、信一は訴えるような眼差まなざしをした。いつも一人ぼっちでいじけて居る子が、何でこんな意外な事を云うのやら、私は少しう

ろたえて、相手の顔を読むようにぼんやり立った儘であったが、日頃は弱虫だの何だのと悪口を云つていじめ散らしたようなものゝ、こういつて眼の前に置いて見ると、有繫良家の息子むすこだけに高く美しい所があるように思われた。糸織の筒袖に博多の献上の帯を締め、黄八丈の羽織を着てきやらこの白足袋せつたに雪駄せつたを穿いた様子が、色の白い瓜実うりざね顔がおの面立おもだちとよく似合つて、今更品位に打たれたように、私はうっとりとして了つた。

「ねえ、萩原の坊ちゃん、家の坊ちゃんと御一緒にお遊びなさいましな。実は今こんにち日手前共にお祭がございましてね、あの成る可く大人しいお可愛らしいお友達を誘つてお連れ申すようにお母様のお云い附けがあつたものですから、それで坊ちゃんがあなたを

お誘いなさるのでございますよ。ね、いらしつて下さいましな。

それともお嫌でございませうか」

附添の女中にこう云われて、私は心中得意になつたが、

「そんなら一旦家へ帰つて、断つてから遊びに行こう」

と、わざと殊勝らしい答をした。

「おやそうでございましたね。ではあなたのお家までお供して参つて、お母様に私からお願い致しましょうか、そうして手前共へ御一緒に参りましょう」

「うん、いゝよ。お前ン所は知つて居るから後から一人でも行けるよ」

「そうでございませうか。それではきつとお待ち申しますよ。お帰

りには私がお宅までお送り申しますから、お心配なさらないううにお家へ断つていらつしやいまし」

「あゝ、それじゃ左様なら」

こう云つて、私は子供の方を向いてなつかしそうに挨拶をしたが、信一は例の品のある顔をにこりともさせず、唯鷹揚おうようにうなずいたゞけであつた。

今日からあの立派な子供と仲好しになるのかと思うと、何となく嬉しい気持がして、日頃遊び仲間の鬘屋かもじやの幸吉や船頭の鉄公などに見付からぬように急いで家へ帰り、盲めくらじま縞の学校着を対ついの黄八丈の不断着に着更えるや否や、

「お母さん、遊びに行つて来るよ」

と、雪駄をつツかけながら格子先に云い捨て、其の儘塙の家へ駈け出して行つた。

有馬学校の前から真つ直ぐに中之橋を越え、浜町の岡田の塙へついで中洲に近い河岸通りへ出た所は、何となくさびれたような閑静な一廓をなして居る。今はなくなつたが新大橋の袂から少し手前の右側に名代の団子屋と煎餅屋があつて、其のすじ向うの角の、長いく塙を繞めぐらした嚴いかめしい鉄格子の門が塙の家であつた。前を通るとこんもりした邸内の植込みの青葉の隙から破風型の日本館の瓦が銀鼠色に輝き、其のうしろに西洋館の褪たい紅こう緋ひ色の煉れん瓦ががちらく見えて、いかにも物持の住むらしい、奥床しい構えであつた。



成る程其の日は何か内にお祭でもあるらしく、陽気な馬鹿囃しの太鼓の音が塀の外に洩れ、開け放された横町の裏木戸からは此の界限に住む貧乏人の子供達が多勢ぞろ／＼庭内に這入つて行く。

私は表門の番人の部屋へ行つて信一を呼んで貰おうかとも思つたが、何となく恐ろしい気がしたので、其の子供達と同じように裏木戸の潜りを抜けて構えの中へ這入つた。

何と云う大きな屋敷だろう。こう思つて私は瓢箪形をした池の汀みぎわの芝生たゝずにゐんでひろい／＼庭の中を見廻した。周延ちかのぶが描いた千代田の大奥と云う三枚続きの絵にあるような遣り水やみず、築山つきやま、雪見燈籠、瀬戸物の鶴、洗い石せきなどがお誂い向きに配置されて、一つの大きな伽藍石がらんせきから小さい飛び石が幾個いくつも幾個も長く続き、

遙か向うに御殿のような座敷が見えている。彼処に信一が居るのかと思うと、もうとても今日は会えないような気がした。

多勢の子供達は毛氈のような青草の上を踏んで、のどかな暖かい日の下に遊んで居る。見ると綺麗に飾られた庭の片隅の稲荷の祠ほくらから裏の木戸口まで一間置き位に地口じぐちの行燈あんどんが並び、接待の甘酒だのおでんだの汁粉だの、屋台が処々に設けられて、餘興のお神楽かぐらや子供角力のまわりには真つ黒に人が集まっている。折角楽しみにして遊びに来たかいもなく、何だかがっかりして私はあてもなく、其処らを歩き廻った。

「兄にいさん、さあ甘酒を飲んでおいで、お銭あしは要らないんだよ」  
甘酒屋の前へ来ると赤い襷をかけた女中が笑いながら声をかけた

が、私はむずかしい顔をして其処を通り過ぎた。やがておでん屋の前へ来ると、また、

「兄さん、さあおでんを喰べておいで、お銭がなくなつても上げるんだよ」

と、頭の禿げた爺に声をかけられる。

「いらぬよ、いらぬよ」

と、私は情ない声を出して、あきらめたように裏木戸へ引き返そうとした時、紺はっぴの法被はっぴを着た酒臭い息の男が何処からかやって来て、

「兄さん、お前はめえまだお菓子を貰わねえんだらう。けえるんならお菓子を貰つてけえりな。さ、此れを持って彼処の御座敷の小母

さんの処へ行くとお菓子をくれるから、早く貰つて来るがいゝ」  
こう云つて真紅まっかに染めたお菓子の切符を渡してくれた。私は悲し  
さが胸にこみ上げて来たが、若しや座敷の方へ行ったら信一に会  
えるか知らんと思ひ、云われる儘に切符を貰つて又庭の中を歩き  
出した。

幸いと其れから間もなく附添の女中に見附けられて、

「坊ちゃん、よくいらして下さいました。もう先からお待ち兼さつき

ねでございますよ。さあ彼方へいらつしやいませ。こう云う卑し  
い子供達の中でお遊びになつてはいけません」

と、親切に手を握られ、私は思わず涙ぐんで直ぐには返事が出来  
なかつた。

床ゆかの高い、子供の丈ぐらい有りそうな縁に沿うて、庭に突き出た  
廣い座敷の蔭へ廻ると、十坪ばかりの中庭に、萩の袖垣を結い繞  
らした小座敷の前へ出た。

「坊ちゃん、お友達がいらつしやいましたよ」

青桐の木立の下から女中が呼び立てると、障子の蔭にばたくと  
小刻みの足音がして、

「此方へお上がんな」

と甲かんだか高い声で怒鳴りながら、信一が縁側へ駈けて来た。あの臆

病な子が、何処を押せばこんな元氣の好い声が出るのだろうか、  
私は不思議に思いつながら、見違える程盛装した友の様子をまぶし  
そうに見上げた。黒羽くろはぶたえ二重のしめの熨斗目の紋附に羽織袴を着けて立つ

た姿は、縁側一杯に照らす麗かな日をまともに浴びて黒い七子の羽織地が銀沙ぎんすなごのようにきら／＼光つて居る。

友達に手をひかれて通されたのは八畳ばかりの小綺麗な座敷で、餅菓子もち菓子の折の底を嗅ぐような甘い香りが部屋の中に漂い、ふくよかな八反の座布団が二つ人待ち顔に敷かれてあつた。直ぐにお茶だのお菓子だのお強飯こわに口取りを添えた溜塗ためぬりの高台だのが運ばれて、

「坊ちゃん、お母様がお友達と仲よくこれを召し上がるようになって。………それから今日は好いお召を召していらつしやるんですから、あんまりお徒いたをなさらないように大人しくお遊びなさいましよ」

と、女中は遠慮している私に強飯やきんとんを勧めて次へ退つて了つた。

物静かな、日あたりの好い部屋である。燃えるような障子の紙に縁先の紅梅の影が映つて、遙かに庭の方から、てん、てん、てん、とお神樂の太鼓の音が子供達のガヤガヤ云う騒ぎに交つて響いて来る。私は遠い不思議な国に來たような気がした。

「信ちゃん、お前はいつも此のお座敷にいるのかい」

「うゝん。此処は本当は姉さんの所とこなの。彼処そこにいろんな面白い姉さんの玩具があるから見せて上げようか」

こう云つて信一は地袋の中から、奈良人形の猩々や、極きめこ込こ細さい工いくの尉じょうと姥うばや、西さい京きょうの芥けし子人形、伏見人形、伊豆蔵人形いずくらなどを

二人のまわりへ綺麗に列べ、さま／＼の男女の姿をした首人形を二畳程の畳の目へ数知れず挿し込んで見せた。二人は布団へ腹這いになって、髯ひげを生やしたり、眼をむきだしたりして居る巧緻な人形の表情を覗き込むようにした。そうしてこう云う小さな人間の住む世界を想像した。

「まだこゝに絵えぞうし双紙が沢山あるんだよ」

と、信一は又袋戸棚から、半四郎や菊之丞の似顔絵のたとうに一杯詰まって居る草双紙を引き擦り出して、色々の絵本を見せてくれた。何十年立ったか判らぬ木版刷の極彩色が、光沢つやも褪せないで鮮やかに匂っている美濃紙の表紙を開くと、黴臭いケバケバの立って居る紙の面に、舊幕時代の美しい男女の姿が生き／＼とし



た目鼻立ちから細かい手足の指先まで、動き出すように描かれて  
 いる。丁度此の屋敷のような御殿の奥庭で、多勢の腰元と一緒に  
 お姫様が螢を追つて居るかと思えば、淋しい橋の袂で深編笠の  
 侍が下郎の首を打ち落し、死骸の懐中から奪い取つた文箱の手紙  
 を、月にかざして読んで居る。其の次には黒装束に覆面の曲者  
 がお局の中へ忍び込んで、ぐつすり寝て居る椎茸鬘しいたけたばの女の喉元  
 へ布団の上から刀を突き通して居る。又ある所では行燈の火影か  
 すかな一と間の中に、濃艶な寝間着姿の女が血のしたゝる剃刀  
 を口に咬え、虚空を掴んで足許に斃れて居る男の死に態ぎまをじろり  
 と眺めて、「ざまを見やがれ」と云いながら立って居る。信一も  
 私も一番面白がつて見たのは奇怪な殺人の光景で、眼球が飛び出

して居る死人の顔だの、胴斬りにされて腰から下だけで立つて居る人間だの、真つ黒な血痕が雲のように斑ふをなして居る不思議な凶面を、夢中になつて覗き込んで居ると、

「あれ、また信ちゃんは人の物を徒いたずらして居るんだね」

こう云つて、友禅の振袖を着た十三四の女の子が襖を開けて駈け込んで来た。額をつまつた、眼元口元の凜り々々しい顔に子供らしい怒りを含んで、つツと立った儘弟と私の方をきり／＼睨ねめ付けている。信一は一と縮みに縮み上つて蒼くなるかと思いの外、

「何云つてるんだい。徒らなんかしやしないよ。お友達に見せてやつてるんじゃないか」

と、まるで取り合わないで、姉の方を振り向きもせず絵本を繰

っている。

「徒らしない事があるもんか。あれ、いけないってばさ」

ばたくと姉は駈け寄つて、見て居る本を引つたくろうとしたが、信一もなか／＼放さない。表紙と裏とを双方が引張つて、綴ぢ目の所が今にも裂けそうになる、暫くそうして睨み合つて居たが、

「姉さんのけちんぼ！ もう借りるもんかい」

と、信一はいきなり本をたゞき捨て、有り合う奈良人形を姉の顔へ投げ付けたが、狙いが外れて床の間の壁へ当つた。

「それ御覧な、そんな徒らをするじゃないか。——またあたしを打つんだね。いゝよ、打つなら沢山お打ち。此の間もお前のお蔭で、こら、こんなあざに痣あざになつてまだ消えやしない。これをお父

様に見せて云つつけてやるから覚えておいで」

恨めしそうに涙ぐみながら、姉は縮緬ちりめんの裾をまくつて、真っ白な右脚の脛はぎに印せられた痣の痕を見せた。丁度膝頭のあたりからふくら脛はぎへかけて、血管が青く透いて見える薄い柔かい肌の上を、紫の斑点がぼかしたように傷いたく々々しく濁染にじんでいる。

「云つつけるなら勝手においつけ。けちんぼく」

信一は人形を足で滅茶々に蹴倒して、

「お庭へ行つて遊ぼう」

と、私を連れて其処を飛び出してしまった。

「姉さん、泣いて居るか知ら」

戸外へ出ると、気の毒なような悲しいような気持になつて私は尋

ねた。

「泣いたつていゝんだよ。毎日喧嘩して泣かしてやるんだ。姉さんたつて彼れはお妾の子なんだもの」

こんな生意気な口をきいて、信一は西洋館と日本館の間にある櫛や榎の大木の蔭へ歩いて行つた。其処は繁茂した老樹の枝がこんもりと日を遮つて、じめじめした地面には青苔が一面に生え、暗い肌寒い気流が二人の襟元へしみ入るようであつた。大方古井戸の跡でもあろう、沼とも池とも附かない濁つた水溜りがあつて、水草が緑青ろくしようのように浮いて居る。二人は其の澁ほとりへ腰を下ろして、湿つぽい土の匂いを嗅ぎながらぼんやり足を投げ出して居ると、何処からともなく幽玄な、微妙な奏楽の響きが洩れて来た。

「あれは何だろう」

こう云いながらも、私は油断なく耳を傾けた。

「あれは姉さんがピアノを弾いて居るんだよ」

「ピアノって何だい」

「オルガンのようなものだって、姉さんがそう云ったよ。異人の女が毎日あの西洋館へ来て姉さんに教えてやってるの」

こう云つて信一は西洋館の二階を指さした。肉色の布のかゝつた窓の中から絶えず洩れて来る不思議な響き。………或る時は森の

奥の妖魔が笑う木霊こだまのような、或る時はお伽とぎばなし 嚟こに出て来る侏

儒共びとが多勢揃つて踊るような、幾千の細かい想像の綾糸で、幼い

頭へ微妙な夢を織り込んで行く不思議な響きは、此の古沼の水底

で奏でるのかとも疑われる。

奏樂の音が止んだ頃、私はまだ消えやらぬ *ecstasy* の尾を心に曳きながら、今にあの窓から異人や姉娘が顔を出しはすまいかと思ひ憧れてじつと二階を視つめた。

「信ちゃん、お前は彼処へ遊びに行かないのかい」

「あゝ徒らをしてはいけないって、お母さんがどうしても上げてくれないの、いつかそつと行って見ようとしたら、錠が下りて居てどうしても開かなかつたよ」

信一も私と同じように好奇心な眼つきをして二階を見上げた。

「坊ちゃん、三人で何かして遊びませんか」

ふと、こう云う声がしてうしろから駈けて来た者がある。其れは

同じ有馬学校の一二年上の生徒で、名前こそ知らないが、毎日のように年下の子供をいじめて居る名代の餓鬼大将だから顔はよく覚えて居た。どうして此奴がこんな処へやって来たのだろうと、訝いづかりながら黙って様子を見て居ると、其の子は信一に仙吉々と呼び捨てにされながら、坊ちゃんくと御機嫌を取って居る。後で聞いて見れば塙の家の馬丁の子であつたが、其の時私は、猛獣遣いのチャリネの美人を見るような眼で、信一を見ない訳には行かなかつた。

「そんなら三人で泥坊ごっこしよう。あたしと栄ちゃんがお巡まわり査さんになるから、お前は泥坊におんなな」

「なつてもいゝけれど、此の間見たいに非道ひどい乱暴をしっこなし



ですよ。坊ちゃんは縄で縛つたり、鼻糞をくつつけたりするんだもの」

此の問答をきいて、私は愈驚いたが、可愛らしい女のような信一が、荒くれた熊のような仙吉をふん縛つて苦しめて居る光景を、どう考えて見ても実際に想像することが出来なかつた。

やがて信一と私は巡查になつて、沼の周囲や木立の間を縫いながら盗賊の仙吉を追い廻したが、此方は二人でも先方は年上だけに中々捕まらない。漸くの事で西洋館の裏手の塀の隅にある物置小屋まで追い詰めた。

二人はひそくと示し合せて、息を殺し、あしおと 蹙音を忍ばせ、そうつと小屋の中へ這入つた。併し仙吉は何処に隠れたものか姿が

見えない。そうして糠味噌だの醤油樽だの、咽せ返るような古臭い匂いが、薄暗い小屋の中にこもって、わらじ虫がぞろ／＼と蜘蛛の巣だらけの屋根裏や樽の周囲に這って居る有様が、何か不思議な面白い徒らを幼い者にそゝのかすようであった。すると何処やらでくす／＼と忍び笑いをするのが聞えて、忽ち梁うつぱりに吊るしてあつた用心籠がめり／＼鳴るかと思うと、其処から「わあ」と云いながら仙吉の顔が現れた。

「やい、下りて来い。下りて来ないと非道い目に合わせるぞ」

信一は下から怒鳴って、私と一緒に箒で顔をつツ突こうとする。

「さあ来い。誰でも傍へ寄ると小便をしっかけるぞ」

仙吉が籠の上から、あわや小便をたれそうにしたので、信一は用

心籠の真下へ廻り、有り合う竹竿で籠の目から仙吉の臀だの足の裏だの、所嫌わずつつ突き始めた。

「さあ、此れでも下りないか」

「あいた、あいた。へい、もう下りますから御免なさい」

悲鳴を揚げてあやまりながら、痛む節々を抑えて下りて来た奴の胸ぐらを取って、

「何処で何を盗んだか、正直に白状しろ」

と、信一は出鱈目に訊問を始める。仙吉は又、やれ白木屋で反物を五反取ったの、にんべんで鯉節を盗んだの、日本銀行でお札をごまかしたのと、出鱈目ながら生意気な事を云った。

「うん、そうか、太い奴だ。まだ何か悪い事をしたろう。人を殺

した覚えはないか」

「へいございます。熊谷土手で按摩を殺して五十両の財布を盗みました。そうして其のお金で吉原へ参りました」

緞帳どんちようしばい芝居しばいか覗のぞき機巧からくりで聞いて来るものと見えて、如何にも当意即妙の返答である。

「まだ其の外にも人を殺したろう。よし、よし、云わないな。云わなければ拷問にかけてやる」

「もう此れだけでございますから、堪忍しておくんなさい」

信一は、手を合わせて拝むようにするのを耳にもかけず、素早く仙吉の締めて居る薄穢い浅黄の唐縮緬の兵児帯を解いて後手に縛り上げた上、其のあまりで両脚の踝くるぶしまで器用に括った。それから

仙吉の髪の毛を引つ張つたり、頬ぺたを摘まみ上げたり、眼瞼まぶたの裏の紅い処をひつくりかえして白眼を出させたり、耳みみや唇の端を掴んで振つて見たり、芝居の子役か雛おしやく妓の手のようなきやしやな青白い指先が狡猾に働いて、肌理きめの粗い黒く醜く肥えた仙吉の顔の筋肉は、ゴムのように面白く伸びたり縮んだりした。其れにも飽きると、

「待て、待て。貴様は罪人だから額に入墨をしてやる」

こう云いながら、其処にあつた炭俵の中から佐倉炭の塊を取り出し、唾つばをかけて仙吉の額へこすり始めた。仙吉は滅茶々にされて崩れ出しそんな顔の輪廓を奇態に歪めながらひい／＼と泣いて居たが、しまいには其の根気さえなくなつて、相手の為すがまゝ

に委せた。日頃学校では馬鹿に強そうな餓鬼大将の荒くれ男が、信一の為めに見る影もない態ざいまになって化け物のような目鼻をして居るのを見ると、私はこれ迄出会ったことのない一種不思議な快感に襲われたが、明日学校で意趣返しされると云う恐れがあるので、信一と一緒に徒らをする気にはなれなかつた。

暫くしてから帯を解いてやると、仙吉は恨めしそうに信一の顔を横目で睨んで、力なくぐたりと其処へ突つ俯した儘何と云つても動かない。腕を掴んで引き起そうとしても亦ぐたりと倒れてしまふ。二人とも少し心配になつて、様子を窺いながら黙つてゐて居たが、

「おい、どうかしたのかい」

と、信一が邪慳じゃけんに襟頸を捕えて、仰向かせて見れば、いつの間にか仙吉は泣く真似をして汚れた顔を筒袖で半分程拭き取ってしまつて居る可笑おかしさに、

「わはゝゝゝ」

と、三人は顔を見合せて笑つた。

「今度は何か外の事をして遊ぼう」

「坊ちゃん、もう乱暴をしちやいけませんよ。こら御覧なさい、こんなひどく痕が附いたじやありませんか」

見ると仙吉の手頸の所には、縛られた痕が赤く残つて居る。

「あたしが狼になるから、二人旅人にならないか。そうしてしまいに二人共狼に喰い殺されるんだよ」

信一が又こんな事を云い出したので、私は薄気味悪かったが、仙

吉が

「やりましょう」

と云うから承知しない訳にも行かなかつた。私と仙吉とが旅人のつもり、此の物置小屋がお堂のつもりで、野宿をしていると、真夜中頃に信一の狼が襲つて来て、頻りに戸の外で吠え始める。とう／＼狼は戸を喰い破つてお堂の中を四つ這いに這いながら、犬のような牛のような稀有けうな呻り声を立て、逃げ廻る二人の旅人を追ひ廻す。信一があまり真面目でやつて居るので、掴まったらどんな事をされるかと、私は心しんから少し恐くなつてにや／＼不安な笑いを浮かべながら、其の実一生懸命俵の上や蕙の蔭を逃げ廻つ



た。

「おい仙吉、お前はもう足を喰われたから歩いちやいけないよ」  
狼はこう云つて旅人の一人をお堂の隅へ追い詰め、体にとび上がつて方々へ喰い付くと、仙吉は役者のするような苦悶の表情をして、眼をむき出すやら、口を歪めるやらいろいろの身振りを巧みに演じて居たが、遂に喉笛を喰い切られて、キヤツと知ち死期しごの悲鳴を最後に、手足の指をぶるゝとわなゝかせ、虚空を掴んでバツタリ倒れてしまった。

さあ今度は私の番だ。こう思うと気が気でなく、急いで樽の上へ跳び上がると、狼に着物の裾を咬えられ、恐ろしい力で下からぐいゝ引つ張られた。私は真つ蒼になつて樽へしつかり掴まつて

見たが、激しい狼の劍幕に氣後れがして、「あゝもうとても助かない」と観念の眼を閉づる間もなく引きずり落され、土間へ仰向きに転げたかと思うと、信一は疾風のように私の首ツたまへのしかゝつて喉笛を喰い切つた。

「さあもう二人共死骸になつたんだからどんな事をされても動いちやいけないよ。此れから骨までしやぶつてやるぞ」

信一にこう云われて、二人ともだらしなく大の字なりに土間へ倒れたまゝ、一寸いっすんも動けなかつた。急に私は体の処々方々がむず痒くなつて、着物の裾のはだけた処から冷めたい風がすうくと股ぐらに吹き込み、一方へ伸ばした右の手の中指の先が微かに仙吉の髪の毛に触れて居るのを感じた。

「此奴の方が太って居て旨そうだから、此奴から先へ喰つてやろう」

信一はさも愉快そうな顔をして、仙吉の体へ這い上がった。

「あんまり非道いことをしちやいけませんよ」

と、仙吉は半眼を開き、小声で訴えるように囁いた。

「そんな非道い事はしないから、動くときかないよ」

むしゃくと仰山に舌を鳴らしながら、頭から顔、胴から腹、両腕から股や脛の方までも喰い散らし土のついた草履のまゝ目鼻の上でも胸の上でも勝手に踏ふみ躪にじるので、又しても仙吉は体中泥だらけになった。

「さあ此れからお臀の肉だ」

やがて仙吉は俯向きに臥かされ、臀を捲くられたかと思うと、薙らつきようを二つ並べたように腰から下が裸体になってぬツと曝し出された。まくり上げた着物の裾を死体の頭へ被せて背中へ跳び乗った信一は、又むしゃくくとやつて居たが、どんな事をされても仙吉はじつと我慢をして居る。寒いと見えて粟立った臀の肉が蒟こん蒟やくのように顫えていた。

今に私もあんな態さまをさせられるのだ。こう思つて密かに胸を轟かせたが、まさか仙吉同様の非道い目にも合わすまい位に考えて居ると、やがて信一は私の胸の上へ跨がって、先ず鼻の頭から喰い始めた。私の耳には甲斐絹の羽織の裏のさやくとこすれて鳴るのが聞え、私の鼻は着物から放つ樟しょうのう腦のうの香を嗅ぎ、私の頬は

羽二重の裂地きれじにふうわりと撫でられ、胸と腹とは信一の生暖かい体の重味を感じている。潤おいのある唇や滑かな舌の端が、ぺろ／＼と擦ぐるように舐めて行く奇怪な感覚は恐ろしいと云う念を打ち消して魅するように私の心を征服して行き、果ては愉快を感じるようになった。忽ち私の顔は左の小鬢こびんから右の頬へかけて激しく踏み躪られ、其の下になった鼻と唇は草履の裏の泥と摩擦したが、私は其れをも愉快に感じて、いつの間にか心も体も全く信一の傀かいらい儡となるのを喜ぶようになってしまった。

やがて私も俯向きにされて裾を剥がされ、腰から下をぺろ／＼と喰われてしまった。信一は、二つの死骸が裸にされた臀を土間へ列べて倒れている様子を、さも面白そうにから／＼笑って見て居

だが、其の時不意に先の女中が小屋の戸口に現れたので、私も仙吉も吃驚びっくりして起き上った。

「おや、坊ちゃんは此処にいらつしやるんですか。まあお召物を台なしに遊ばして何をなすつていらつしやるんですね。どうして又こんな穢い所ではかりお遊びになるんでしょう。仙ちゃん、お前が悪いんだよ、ほんとに」

女中は恐ろしい眼つきをして叱りながら、泥の足型が印せられて居る仙吉の目鼻を、様子ありげに眺めて居る。私はまだ踏みつけられた顔の痕がぴり／＼するのをじつと堪えて何か餘程の悪事でも働いた後のような気になって立ちすくんだ。

「さあ、もうお風呂が沸きましたから、好い加減に遊ばしてお家

へお這入りなさいませんと、お母様に叱られますよ。萩原の坊ちやんも亦いらしつて下さいましな。もう遅うございますから、私がお宅までお送り申しましょうか」

女中も私にだけは優しくしたが、

「独りで帰れるから、送つて貰わないでもいゝの」

こう云つて私は辞退した。

門の所まで送つて来てくれた三人に、

「あばよ」

と云つて戸外へ出ると、いつの間にか街は青い夕靄ゆうもやに罩こめられて、河岸かしどお通りにはちらく／＼灯がともつて居る。私は恐ろしい不思議な国から急に人里へ出て来たような気がして、今日の出来事を

夢のように回想しながら家へ帰って行つたが、信一の氣高く美しい器量や人を人とも思わぬ我が儘な仕打ちは、一日の中にすっかり私の心を奪つて了つた。

明くる日学校へ行つて見ると、昨日あんな非道い目に会わされた仙吉は、相変らず多勢の餓鬼大将になつて弱い者いじめをして居る代り、信一は又いつもの通りの意氣地なしで、女中と一緒に小さくなつて運動場の隅の方にいじけて居る氣の毒さ。

「信ちゃん、何かして遊ばないか」

と、たま／＼私が声をかけて見ても、

「うゝん」

と云つたなり、眉根を寄せて不機嫌らしく首を振るばかりである。



それから四五日立った或る日のこと、学校の帰りがけに信一の女中は又私を呼び止めて、

「今日はお嬢様のお雛様が飾ってございますから、お遊びにいらつしやいまし」

こう云つて誘つてくれた。

其の日は表の通用門から番人にお時儀じぎをして這入つて、正面の玄関の傍にある細格子の出入り口を開けると、直ぐに仙吉が跳んで来て廊下伝いに中二階の十畳の間へ連れて行つた。信一と姉の光子は雛段の前に臥そべりながら、豆炒りまめいを喰べて居たが、二人が這入つて来ると急にくすくす笑い出した様子が、何か又怪けしからぬいたず徒らを企んで居るらしいので、

「坊ちゃん、何か可笑しいことがあるんですか」

と、仙吉は不安らしく姉弟の顔を眺めて居る。

緋羅紗ひらしやを掛けた床の雛段には、浅草の観音堂のような紫宸殿ししいでんの

藁いらかが聳え、内裏様だいりさまや五人囃にんばやしや官女が殿中に列んで、左近さこんの桜

右近うこんの橘の下には、三人上戸じようごの仕丁じちようが酒を煖あためて居る。其の

次の段には、燭台だのお膳だの鉄漿おはぐろの道具だの唐草の金蒔絵を

した可愛い調度が、此の間姉の部屋にあつたいろ／＼の人形と一

緒に飾つてある。

私が雛段の前に立つて、つく／＼と其れに見惚みとれて居ると、う

しろからそうつと信一がやって来て、

「今ね、仙吉を白酒で酔っ拂わしてやるんだよ」

こう耳うちをしたが、直ぐにばたくと仙吉の方へ駈けて行つて、「おい仙吉、これから四人よつたりでお酒盛りをしようじゃないか」と何喰わぬ顔で云い出した。

四人は圓くなつて、豆炒りを肴に白酒を飲み始めた。

「此れはどうも結構な御酒ごしゆでございますな」

など、大人めいた口をきいて皆を笑わせながら、仙吉は猪口ちよくを持つ

つような手つきで茶飲み茶碗からぐいぐいと白酒を呷あおつた。今に

酔つ拂うだろうと思うと可笑しさが胸へこみ上げて、時々姉の光

子は堪りかねたように腹を抱えたが、仙吉が酔つ拂う時分には少

しばかりお相手をした他の三人も、そろそろ怪しくなつて来た。

下腹の辺に熱い酒がぶつ／＼沸き上がつて、額から双の蟀こめかみ谷が

ほんのり汗ばみ、頭の鉢の周囲が妙に痺れて、畳の面は船底のよ  
うに上下左右へ揺れて居る。

「坊ちゃん私は酔いましたよ。みんな皆も真赤な顔をして居るじゃありませんか。一つ立って歩いて見ませんか」

仙吉は立ち上がって大手を振りながら座敷を歩き出したが、直ぐに足許がよろけて倒れる拍子に、床柱へこつんと頭を打ち付けたので、三人がどつと吹き出すと、

「あいつ、あいつ」

と、頭をさすって顔をしか顰めて居る当人も可笑しさが堪えられず、鼻を鳴らしてくすくす笑って居る。

やがて三人も仙吉の真似をして立ち上り、歩いては倒れ、倒れて

は笑い、キヤツキヤツと囃に乗って途方もなく騒ぎ出した。

「エーイツ、あゝ、好い心持だ。己は酔つて居るんだぞ、べらんめえ」

仙吉が臀を端折つて弥造やぞうを拵え、職人の真似をして歩くと、信一も私も、しまいには光子までが臀を端折つて肩へ拳骨を突つ込み、丁度お嬢吉三じよきちざうのような姿をして、

「べらんめえ、己れは酔つ拂いだぞ」

と、座敷中をよろゝ練り歩いては笑い転げる。

「あツ、坊ちゃんく、狐ごっこをしませんか」

仙吉がふと面白い事を考え付いたようにこう云い出した。私と仙吉と二人の田舎者が狐退治に出かけると、却つて女に化けた光子

の狐の爲めに化かされて了い、散々な目に会つて居る所へ、侍の信一が通りかゝつて二人を救つた上、狐を退治してくれると云う趣向である。まだ酔つ拂つて居る三人は直ぐに賛成して、其の芝居に取りかゝつた。

先ず仙吉と私とが向う鉢巻しりばしよに臀端折りで、手にくはたきを振りかざし、

「どうも此の辺に悪い狐が出て徒らをするから、今日こそ一番退治してくれべえ」

と云いながら登場する。向うから光子の狐がやって来て、

「もし、もし、お前様達に御馳走して上げるから、あたしと一緒にいらつしやいな」

こう云つて、ほんと、二人の肩を叩くと、忽ち私も仙吉も化かさ  
れて了い、

「いよう、何とはあ素晴らしい別嬪べっぴんでねえか」  
など、眼を細くして光子にでれつき始める。

「二人とも化かさされてるんだから、糞うんこを御馳走のつもりで喰べる  
んだよ」

光子は面白くて堪らぬようにゲラゲラ笑いながら、自分の口で喰  
いちぎった餡ころ餅だの、滅茶滅茶に足で踏み潰した蕎麦そば饅頭まんじゅう  
だの、鼻汁で練り固めた豆妙りだのを、さも穢ならしそうに皿の  
上うずたかへ堆く盛つて私達の前へ列べ、

「これは小便のお酒のつもりよ。——さあお前さん、一つ召し

上がれ」

と、白酒の中へ痰や唾吐つばきを吐き込んで二人にすゝめる。

「おゝおいしい、おゝおいしい」

と舌したつゞみ鼓を打ちながら、私も仙吉も旨そうに片端から残らず喰べてしまったが、白酒と豆炒とは変に塩からい味がした。

「これからあたしが三味線を弾いて上げるから、二人お皿を冠つて踊るんだよ」

光子がはたきを三味線の代りにして「こりやく〜」と唄い始めると、二人は菓子皿を頭へ載せて、「よい来た、よいやさ」と足拍子を取つて踊り出した。

其処へやって来た侍の信一が、忽ち狐の正体を見届ける。



「獸の癖に人間を欺すなど、は不届きな奴だ。ふん縛つて殺して  
了うからそう思え」

「あれツ、信ちゃん乱暴な事をすると思かれないよ」

勝気な光子は負けるが嫌さに信一と取っ組み合い、お転婆の本性  
を現わして強情にも中々降参しない。

「仙吉、この狐を縛るんだからお前の帯をお貸し。そうして暴れ  
ないように二人で此奴の足を抑えて居ろ」

私は此の間見た草双紙の中の、旗本の若侍が ちゅうげん 仲間と力を協わ

せて美人を掠奪する挿絵の事を想い泛かべながら、仙吉と一緒に  
友禅の裾模様の上から二本の脚をしつかりと抱きかゝえた。其の  
間に信一は辛うじて光子を後手に縛り上げ、漸く縁側の欄干に括

り着ける。

「栄ちゃん、此奴の帯を解いて猿轡さるぐつわを箆めておやり」

「よし来た」

と、私は早速光子の後に廻つて鬱金縮緬うこんの扱帯しごきを解き、結いたての唐人鬘たばがこわれぬように襟足の長い頸すじへ手を挿し入れ、しつとりと油にしめつて居る鬘たばの下から耳を掠めて頤おとがいのあたりをぐるぐると二た廻り程巻きつけた上、力の限り引き絞つたから縮緬はぐいぐと下しもぶく脹れのした頬の肉へ喰い入り、光子は金閣寺の雪姫のように身を悶えて苦しんで居る。

「さあ今度はあべこべに貴様を糞攻めにしてやるぞ」

信一が餅菓子を手当り次第に口へ啣ふくんでは、ぺっくくと光子の顔

へ吐き散らすと、見る／＼うちにさしも美しい雪姫の器量も癩病やみか瘡<sup>かさ</sup>つかきのように、二た目と見られない姿になつて行く面白さ。私も仙吉もとう／＼釣り込まれて、

「こん畜生、よくも先己<sup>さつき</sup>達に穢い物を喰わせやがったな」

こう云つて信一と一緒にぺ／＼とやり出したが、其れも手緩くなつて、しまいには額と云わず、頬と云わず、至る所へ喰いちぎつた餅菓子を擦りつけて、餡ころを押し潰したり、大福の皮をなすりつけたり、また／＼くうちに光子の顔を萬遍なく汚してしまつた。目鼻も判らぬ真つ黒なのつぺらぼうな怪物が唐人髷に結つて、濃艶な振り袖姿をしている所は、さしずめ百物語か化物合戦記に出て来そうで、光子はもう抵抗する張合もなくなつたと見え、何

をされても大人しく死んだようになって居る。

「今度だけは命を助けてやる。此れから人間を化かしたりなんかすると殺して了うぞ」

間もなく信一が猿轡や縛いましめを解いてやると、光子はふいと立ち上つて、いきなり襖の外へ、廊下をばたくと逃げて行つた。

「坊ちゃん、お嬢さんは怒つて云つつけに行つたんですぜ」

今更飛んでもない事をしたと云う風に、仙吉は心配らしく私と顔を見合わせる。

「なに云つつけたつて構うもんか、女の癖に生意気だから、毎日喧嘩していじめてやるんだ」

信一が空そらうそぶ嘯そぶいて威張つて居る所へ、今度はすうツと徐しずかに襖

が開いて、光子が綺麗に顔を洗つて戻つて来た。館と一緒に白粉<sup>ろい</sup>までも洗い落して了つたと見え、却つて前よりは冴え／＼と  
して、つやのある玉肌の生地<sup>きじ</sup>が一と際透き徹るように輝いて居る。  
定めし又一と喧嘩持ち上るだろうと待ち構えて居ると、

「誰かに見つかるときまりが悪いから、そうツとお湯殿へ行つて  
落して来たの。——ほんとに皆乱暴<sup>みんな</sup>だったらありやしない」

と、光子は物柔かに恨みを列べるだけで、而もにこ／＼笑つて居る。

すると信一は凶に乗つて、

「今度は私<sup>あたし</sup>が人間で三人犬にならないか。私がお菓子や何かを投  
げてやるから、皆<sup>みんな</sup>四つ這いになつて其れを喰べるのさ。ね、い、

だろ」

と云い出した。

「よし来た、やりましょう。——さあ犬になりましたよ。わん、わん、わん」

早速仙吉は四つ這いになって、座敷中を威勢よく駈け廻る。其の尾について又私が駈け出すと光子も何と思つたか、

「あたしは雌犬よ」

と、私達の中へわり込んで来て、其処ら中を這い廻つた。

「ほら、ちんく。……お預けく」

など、三人は勝手な藝をやらせられた揚句、

「よウし！」

と云われ、ば、先を争つてお菓子のある方へ跳び込んで行く。

「あゝ、好い事がある。待て、待て」

こう云つて信一は座敷を出て行つたが、間もなく緋縮緬のちやんちやんを着た本当の狎ちんを二匹連れて来て、我々の仲間入りをさせ、喰いかけの餡ころだの、鼻糞や唾吐つばきのついた饅頭だのを置へばらゝゝ振り撒くと、犬も狎も我れ勝ちに獲物えものの上へ折り重なり、齒をむき出し舌を伸ばして、一つ餅菓子を喰い合つたり、どうかするとお互に鼻の頭を舐め合つたりした。

お菓子を平げて了つた狎は、信一の指の先や足の裏をぺろゝやり出す。三人も負けない氣になつて其の真似を始める。

「あゝ、擦ぐつたい、擦ぐつたい」

と、信一は欄干に腰をかけて、真つ白な柔かい足の裏を迭るかわ／＼私達の鼻先へつき出した。

「人間の足は塩辛い酸っぱい味がするものだ。綺麗な人は、足の指の爪の恰好まで綺麗に出来て居る」

こんな事を考えながら私は一生懸命五本の指の股をしやぶった。

狎はますくくじゃれつき出して仰向きに倒れて四つ足を虚空に踊らせ、裾を咬えてはぐいぐ引つ張るので、信一も面白がつて足で顔を撫で、やったり、腹を揉んでやったり、いろいろな事をする。私も其の真似をして裾を引つ張ると、信一の足の裏は、狎と同じように頬を踏んだり額を撫でたりしてくれたが、眼球めだまの上を踵で押された時と、土踏まずで唇を塞がれた時は少し苦しかった。



そんな事をして、其の日も夕方まで遊んで帰ったが、明くる日からは毎日のように塙の家を訪ね、いつも授業を終えるのが待ち遠しい位になって、明けても暮れても信一や光子の顔は頭の中を去らなかつた。漸く馴れるに随つて信一の我が儘は益 つのり、私も全く仙吉同様に手下にされ、遊べば必ず打たれたり縛られたりする。おかしな事にはあの強情な姉までが、狐退治以来すっかり降参して、信一ばかりか私や仙吉にも逆うような事はなく、時々三人の側へやって来ては、

「狐ごっこをしないか」

など、却つていじめられるのを喜ぶような素振りさえ見え出した。

信一は日曜の度毎に浅草や人形町の玩具屋へ行つて鎧刀を買つて来ては、早速其れを振り廻すので、光子も私も仙吉も体に痣の絶えた時はない。追い／＼と芝居の種も盡きて来て、例の物置小屋だの湯殿だの裏庭の方を舞台に、いろ／＼の趣向を凝らしては乱暴な遊びに耽つた。私と仙吉が光子を縊め殺して金を盗むと、信一が姉さんの仇と云つて二人を殺して首を斬り落したり、信一と私と二人の悪漢がお嬢様の光子と郎党の仙吉を毒殺して、屍体を河へ投げ込んだり、いつも一番いやな役廻りになつて非道い目に合わされたのは光子である。しまいには紅や絵の具を体へ塗り、殺された者は血だらけになつてのた打ち廻つたが、どうかすると信一は本物の小刀を持って来て、

「此れで少うし切らせないか。ね、ちよいと、ぽつちりだからそんなに痛かないよ」

こんな事を云うようになった。すると三人は素直に足の下へ組み敷かれて、

「そんなに非道く切つちや嫌だよ」

と、まるで手術でも受けるようにじつと我慢しながら、其の癖恐ろしそうに傷口から流れ出る血の色を眺め、眼に一杯涙ぐんで肩や膝のあたりを少し切らせる。私は家へ帰うちつて毎晩母と一緒に風呂へ這入る時、其の傷痕を見付けられないようにするのが一と通りの苦勞ではなかつた。

そう云う風な遊びが凡そ一と月も続いた或る日のこと、例の如く

塙の家へ行つて見ると、信一は齒医者へ行つて留守だとかで、仙吉が一人手持無沙汰でぽつ然<sup>ねん</sup>としている。

「光ちゃんは？」

「今ピアノのお稽古をして居るよ。お嬢さんの居る西洋館の方へ行つて見ようか」

こう云つて仙吉は私をあの大木の木蔭の古沼の方へ連れて行つた。忽ち私は何も彼も忘れて、年経る櫟の根方に腰を下したまゝ、二階の窓から洩れて来る楽の響きにうっとり<sup>ほとり</sup>と耳を澄ました。

此の屋敷を始めて訪れた日に、やはり古沼の漣<sup>ほとり</sup>で信一と一緒に聞いた不思議な響き、……或る時は森の奥の妖魔が笑う木霊<sup>こだま</sup>のような、ある時はお伽噺に出て来る侏儒<sup>こびと</sup>共が多勢揃つて踊るような、

幾千の細かい想像の綾糸で、幼い頭へ微妙な夢を織り込んで行く不思議な響きは、今日もあの時と同じように二階の窓から聞えて居る。

「仙ちゃん、お前も彼処へ上った事はないのかい」  
奏楽の止んだ時、私は又止み難い好奇心に充たされて仙吉に尋ねた。

「あゝ、お嬢さんと掃除番の寅さんの外は、あんまり上らないんだよ。己ばかりか坊ちゃんだつて知りやしないぜ」

「中はどんなになつて居るんだろう」

「何でも坊ちゃんのお父様が洋行して買つて来たいろんな珍らしい物があるんだつて。いつか寅さんに内證で見せてくれつて云つ

たら、いけないってどうしても聞かなかつた。——もうお稽古が済んだんだぜ。栄ちゃん、お前お嬢さんと呼んで見ないか」

二人は声を揃えて、

「光ちゃん、お遊びな」

「お嬢さん、遊びませんか」

と、二階の方へ怒鳴つて見たが、ひっそりとして返辞はない。今迄聞えて居たあの音楽は、人なき部屋にピアノとやらが自然に動いて、微妙な響きを発したのかとも怪しまれる。

「仕方がないから、二人で遊ぼう」

私も仙吉一人が相手では、いつものようにも騒がれず、張合いが抜けて立ち上ると、不意ににうしろでげら〜と笑い声が聞え、

光子がいつの間にか其処へ来て立って居る。

「今私達が呼んだのに、何故返辞しなかったんだい」

私は振り返って詰るなじような眼つきをした。

「何処であたしを呼んだの」

「お前が今西洋館でお稽古をしてる時に、下から声をかけたのが聞えなかったかい」

「あたし西洋館なんか居やあしないよ。彼処へは誰も上れないんだもの」

「だって、今ピアノを弾いて居たじゃないか」

「知らないわ、誰か他の人だわ」

仙吉は始終の様子を胡散臭うさんくさい顔をして見て居たが、

「お嬢さん、嘘をついたって知ってますよ。ね、栄ちゃんと私を彼処へ内證で連れて行つて下さいな。又強情を張つて嘘をつくんですか、白状しないと斯うしますよ」

と、にや／＼底気味悪く笑いながら、早速光子の手頸をじり／＼と捻じ上げにかゝる。

「あれ仙吉、後生だから堪忍しておくれよう。嘘じゃないんだつてばさあ」

光子は拜むような素振りをしたが、別段大声を揚げるでも逃げようとするでもなく為すが儘に手を捻じられて身悶えして居る。きやしやな腕かいなの青白い肌が、頑丈な鉄のような指先にむずと掴まれて、二人の少年の血色の快い対照は、私の心を誘うようにするの



で、

「光ちゃん、白状しないと拷問にかけるよ」

こう云つて、私も片方を捻じ上げ、扱帯を解いて沼の側の櫓の幹へ縛りつけ、

「さあ此れでもか、此れでもか」

と、二人は相変らず抓ったり攪ぐったり、夢中になって折檻した。

「お嬢さん。今に坊ちゃんが帰つて来ると、もっと非道い目に会いますぜ。今の内に早く白状しておしまいなさい」

仙吉は光子の胸ぐらを取つて、両手でぐつと喉を縊めつけ、

「ほら、だんく苦しくなつて来ますよ」

こう云いながら、光子が眼を白黒させて居るのを笑つて見て居た

が、やがて今度は木から解いて地面に仰向きに突倒し、

「へえ、此れは人間の縁台でございます！」

と、私は膝の上、仙吉は顔の上へドシリと腰をかけ、彼方此方へ身を揺す振りながら光子の体を臀で踏んだり壓したりした。

「仙吉、もう白状するから堪忍しておくれよう」

光子は仙吉の臀に口を塞がれ、虫の息のような細い声で憐れみを乞うた。

「そんなら屹度白状しますね。やっぱり先は西洋館さつきに居たんでしよう」

臀を擡げて少し手を緩めながら、仙吉が訊問する。

「あゝ、お前が又連れて行けって云うだろうと思って嘘をついた

の。だつてお前達をつれて行くと、お母さんに叱られるんだもの。聞くと仙吉は眼を瞋いからして威嚇するように、

「よござんす、連れて行かないんなら。そら、又苦しくなりますよ」

「あいた、あいた。そんなら連れて行くよ。連れてつて上げるからもう堪忍しておくれよ。其の代り晝間だと見付かるから晩にしてお呉くんな。ね、そうすればそうツと寅造の部屋から鍵を持って来て開けて上げるから、ね、栄ちゃんも行きたければ晩に遊びに来ないか」

とう／＼降参し出したので、二人は尚も地面へ抑えつけた儘、色々と晩の手筈を相談した。丁度四月五日のことで、私は水天宮の

縁日へ行くと詐いつわつて家を跳び出し、暗くなつた時分に表門から西洋館の玄関へ忍び込み、光子が鍵を盗んで仙吉と一緒にやつて来るのを待ち合わせる。但し私が時刻に遅れるようであつたら、二人は一と足先に這入つて、二階の階段を昇り切つた所から二つ目の右側の部屋に待つて居る、と、斯う云う約束になつた。

「よし、そうきまつたら赦して上げます。さあお起きなさい」と、仙吉は漸くの事で手を放した。

「あゝ苦しかった。仙吉に腰をかけられたら、まるで息が出来ないんだもの。頭の下に大きな石があつて痛かつたわ」

着物の埃を拂つて起き上つた光子は、体の節々を揉んで、上の気ぼせたように頬や眼球を真紅にして居る。

「だが一体二階にはどんな物があるんだい」

一旦家へ帰るとなつて、別れる時私はこう尋ねた。

「栄ちゃん、吃驚しちやいけないよ。其りや面白いものが沢山あるんだから」

こう云つて、光子は笑いながら奥へ駈け込んで了つた。

戸外へ出ると、もうそろ／＼人形町通りの露店にかんてらがともされて、撃剣の見せ物の法螺の貝がぶ／＼と夕暮れの空に鳴り渡り、有馬様のお屋敷前は黒山のように人だかりがして、売薬屋が女の胎内を見せた人形を指しながら、何か頻りと声高に説明して居る。いつも楽しみにして居る七十五座のお神楽も、永井兵助の居合い抜きも今日は一向見る気にならず、急いで家へ帰つてお

湯へ這入り、晩飯もそこ〜くに、

「縁日に行つて来るよ」

と、再び飛び出したのは大方七時近くであつたろう。水のように  
湿うるんだ青い夜の空氣に縁日のあかりが溶け込んで、きんせいろう金清楼の二  
階の座敷には乱舞の人影が手に取るように映つて見え、米屋町の  
若い衆や二丁目の矢場の女や、いろ〜の男女が両側をぞろ〜  
往来して、今が一番人の出さかる刻限である。中之橋を越えて、  
暗い淋しい浜町の通りからうしろを振り返つて見ると、薄曇りの  
した黒い空が、ぼんやりと赤く濁にじ染んでゐる。

いつか私は塙の家の前に立つて、山のように黒く聳えた高い蕨を  
見上げていた。大橋の方から肌寒い風がしめやかに闇を運んで吹

いて来て、例の櫛の大木の葉が何処やら知れぬ空の中途でばさら／＼と鳴って居る。そうツと扉の中を覗いて見ると門番の部屋のあかりが戸の隙間から縦に細長い線を成して洩れて居るばかり。母屋の方はすっかり雨戸がしまつて、曇天の背景に魔者の如く森閑と眠って居る。表門の横にある通用口の、冷めたい鉄格子へ両手をかけて暗闇の中へ押し込むようにすると、重い扉がキーと軋んで素直に動く。私は雪駄がちやらつかぬように足音を忍ばせ、自分で自分の忙しい呼吸せわや高まった鼓動の響きを聞きながら、闇中に光って居る西洋館の硝子戸を見つめて歩いて行つた。

次第々々に眼が見えるようになった。八つ手の葉や、櫛の枝や、かすがどうろう春日燈籠や、いろ／＼と少年の心を怯おびえさすような姿勢を取つ

た黒い物が、小さい瞳の中へ暴れ込んで来るので、私は御影の石段に腰を下し、しん／＼と夜氣のしみ入る中に首をうなだれた儘、息を殺して待つて居たが、いつかな二人はやつて来ない。頭上へ蓋さつて来るような恐怖が体中をぶる／＼顫わせて、齒の根が／＼く／＼わな／＼いて居る。あゝ、こんな恐ろしい所へ来なければ好かつた、と思ひながら、

「神様、私は悪い事を致しました。もう決してお母様に謫をついたり、内證で人の家へ這入つたり致しません」  
と、夢中で口走つて手を合わせた。

すつかり後悔して、歸る事にきめて立ち上つたが、ふと玄關の硝子障子の扉の向うに、ぽつりと一点小さな蠟燭の灯らしいものが



見えた。

「おや、二人共先へ這入ったのかな」

こう思うと、忽ち又好奇心の奴隷となつて、殆ど前後の分別もなく把手とつてへ手をかけ、グルツと廻すと造作もなく開いて了つた。

中へ這入ると、推測に違わず正面の螺旋階らせんかいの上り端ばなに、――

大方光子が私のために置いて行つたものである。半ば燃え盡きて蠟がとろとろ流れ出して居る手燭が、三尺四方へ覺束ない光を投げて居たが、私と一緒に外から空気が流れ込むと、炎がゆらゆらと瞬いて、ワニス塗りの欄干の影がぶるぶらと動揺して居る。

固唾を呑んで抜き足さし足、盗賊のように螺旋階を上り切つたが、二階の廊下はますます真つ暗で、人の居そうなけはいもなく、カ

タリとも音がしない。例の約束をした二つ目の右側の扉、——  
それへ手搜りで擦り寄ってじつと耳をそばだ敬て、見ても、矢張ひっそり  
りと静まり返って居る。半ば、恐怖、半ば、好奇の情に充たされ  
て、まゝよと思ひながら私は上半身を靠せかけ、扉をグツと押し  
て見た。

ぱつと明るい光線が一時に瞳を刺したので、クラクラしながら眼  
をしばたゝき、妖怪の正体を見定めるように注意深く四壁を見廻  
したが誰も居ない。中央に吊るされた大ランプの、五色のプリズ  
ムで飾られた蝦色の傘の影が、部屋の上半部を薄暗くして、金銀  
を鏤めた椅子だの卓子だの鏡だのいろくゝの裝飾物が燦然と輝き、  
床に敷き詰めた暗紅色の敷物の柔かさは、春草の野を踏むように

足袋たびを隔て、私の足の裏を喜ばせる。

「光ちゃん」

と呼んで見ようとしても死滅したような四辺あたりの寂寞が唇を壓し、舌を強張こわばらせて声を発する勇氣もない。始めは気が付かなかつたが、部屋の左手の隅に次の間へ通ずる出口があつて、重い緞子どんすの帷まくが深い皺を畳み、ナイヤガラの瀑布を想わせるようにどさりと垂れ下つて居る。其れを排して、隣室の模様を覗いて見ようとしたが、帷の向うが真つ暗なので手が竦すくむようになる。其の時不意にマントルピース暖炉棚の上の置時計がジーと蟬のように呟いたかと思うと、忽ち鏗然こうぜんと鳴つてキンコンケンと奇妙な音楽を奏で始めた。これを合図に光子が出て来るのではあるまいかと帷の方を一心に視

詰めて居たが、二三分の間に音楽も止んで了い、部屋は再び元の静肅に復つて、かえ緞子の皺は一と筋も揺がず、じやくねん寂然と垂れ下がって居る。

ぼんやりと立って居る私の瞳は、左側の壁間に掛けられた油絵の肖像畫の上に落ちて、うか／＼と其の額がくの前まで歩み寄り、丁度ランプの影で薄暗くなつて居る西洋の乙女の半身像を見上げた。

厚い金の額縁で、長方形に劃しきられた畫面の中に、重い暗い茶褐色の空氣が漂うて、纔わずかに胸をお納戸色の衣に蔽い、裸体の儘の肩と腕とに金や珠玉の鑲わを飾つた下げ髪かみの女が、夢みるように黒眼がちの瞳をぱツちりと開いて前方を視つめて居る。暗い中にもくツきりと鮮やかに浮き出て居る純白の肌の色、氣高い鼻筋から唇、

頤、両頬へかけて見事に神々しく整った、端嚴な輪廓、——これがお伽噺に出て来る天使と云うのであろうかと思ひながら、私は暫くうつとりと見上げて居たが、ふと額から三尺ばかり下の壁に沿うた圓卓の上に、蛇の置物のあるのに気が付いて其の方へ眼を転じた。此れは又何で拵えたものか、二た廻り程とぐるを巻いて蕨わらびのように頭を擡げた姿勢と云い、ぬら／＼した青大将の鱗の色と云い、如何にも真に迫った出来栄である。見れば見る程つく／＼感心して今にも動き出しそうな気がして来たが、突然私は「おや」と思つて二三歩うしろへ退いた儘眼を見張つた。気のせいか、どうやら蛇は本当に動いて居るようである。爬虫動物の常として極めて緩慢に、注意しなければ殆ど判らないくらい悠長

な態度で、確かに首を前後左右へ蠢かうごめしている。私は総身そうしんへ水をかけられたように寒くなり、真つ蒼な顔をして死んだように立ち竦んでしまった。すると緞子の帷の皺の間から、油絵に書いてある通りの乙女の顔が、又一つ又ツと現れた。

顔は暫くにやくと笑つて居たが、緞子の帷が二つに割れてするくと肩をすべつて背後で一つになつて了うと、女の子は全身を現わして其処に立つて居る。

纒かに膝頭に届いて居る短いお納戸なんどの裳裾もすその下は、靴足袋も纏わぬ石膏のような素足に肉色の床靴スリッパを穿き、溢れるようにこぼれかゝる黒髪を両肩へすべらせて、油絵の通りの腕環に頸飾りを着け、胸から腰のまわりへかけて肌を犇ひしと緊めつけた衣の下にはし

なやかな筋肉の微動するのが見えて居る。

「栄ちゃん」

と、牡丹の花弁を啣んだような紅い唇をふるわせた一刹那、私は始めて、彼の<sup>あ</sup>油絵が光子の肖像畫である事に気が付いた。

「……………先刻<sup>さつき</sup>からお前の来るのを待つて居たんだよ」

こう云つて、光子は脅やかすようにじり／＼側へ歩み寄つた。何とも云えぬ甘い香が私の心を攪ぐつて眼の前に紅い霞がちら／＼する。

「光ちゃん一人なの？」

私は救いを求めるような声で、おず／＼尋ねた。何故今夜に限つて洋服を着て居るのか、真つ暗な隣りの部屋には何があるのか、

まだいろ／＼聞いて見たい事はあつても喉のどほとけ佛につかえて居て容易に口へは出て来ない。

「仙吉に会わせて上げるから、あたしと一緒に此方へおいでな」  
光子に手頸を把られて、俄かにガタガタ顫え出しながら、

「あの蛇は本当に動いて居るんじゃないか知ら」と、  
と、氣懸りで堪らなくなつて私は尋ねた。

「動いて居やしないじゃないか。あれ御覽な」  
こう云つて光子はにや／＼笑つて居る。成る程そう云われて見れば、先は確かに動いて居たあの蛇が、今はじつととぐるを巻いてさつき少しも姿勢を崩さない。

「そんなものを見て居ないで、あたしと一緒に此方へおいでよ」



暖かく柔かな光子の掌は、たなごころとても振り放す事の出来ない魔力を持

って居るように軽く私の腕かいなを捕えて、薄気味の悪い部屋の方へず

る／＼と引つ張って行き、忽ち二人の体は重い緞子の帷の中へめり込んだかと思う間もなく、真つ暗な部屋の中に這入つて了つた。

「栄ちゃん、仙吉に会わせて上げようか」

「あゝ、何処に居るのだい」

「今蠟燭をつけると判るから待つておいで。——それよりお前に面白いものを見せて上げよう」

光子は私の手頸を放して、何処かへ消え失せて了つたが、やがて部屋の正面の暗い闇にピシピシと凄じい音を立てゝ、細い青白い光の糸が無数に飛びちがい、流星のように走つたり、波のように

のたくつたり、圓を畫いたり、十文字を畫いたりし始めた。

「ね、面白いだろ。何でも書けるんだよ」

こう云う声がして、光子は又私の傍へ歩いて来た様子である。今迄見えて居た光の糸はだんくんに薄らいで暗に消えかゝつて居る。

「あれは何？」

「はくらい舶来マツチの燐寸で壁こすを擦つたのさ。暗闇なら何を擦つても火が出るんだよ。栄ちゃんの着物を擦つて見ようか」

「お止しよ、あぶないから」

私は吃驚して逃げようとする。

「大丈夫だよ、ね、ほら御覧」

と、光子は無造作に私の着物の上うわん前を引っ張つて燐寸を擦ると、

絹の上を蛍が這うように青い光がぎらぎらして、ハギハラと片仮名の文字が鮮明に描き出された儘、暫くは消えずに居る。

「さあ、あかりを付けて仙吉に会わせて上げようね」

ピシツと鑽火きりびを打つように火花が散つて、光子の手から蠟燭寸が燃え上ると、やがて部屋の中程にある燭台に火が移された。

西洋蠟燭の光は、朦朧と室内を照して、さま／＼の器物や置物の黒い影が、魑魅魍魎ちみもうりょうの跋扈ばつこするような姿を、四方の壁へ長く大きく映して居る。

「ほら仙吉は此処に居るよ」

こう云つて、光子は蠟燭の下を指さした。見ると燭台だと思つたのは、仙吉が手足を縛られて両肌を脱ぎ、額へ蠟燭を載せて仰向

いて坐つて居るのである。顔と云わず頭と云わず、鳥の糞のように溶け出した蠟の流れは、両眼を縫い、唇を塞いで頤の先からぼたくくと膝の上に着ち、七分通り燃え盡した蠟燭の火に今や睫毛が焦げそうになつて居ても、婆羅門ぼらもんの行者ぎようじやの如く胡坐あぐらをかいて拳こぶしを後手うしろでに括られたまゝ、大人おとなしく端然と控えて居る。

光子と私が其の前に立ち止まると、仙吉は何と思つたか蠟で強張つた顔の筋肉をもぐぐくと動かし、漸く半眼うすめを開いて怨めしそうにじつと私の方を睨んだ。そうして重苦しい切ない声で嚴かに喋り出した。

「おい、お前も己も不断あんまりお嬢様をいじめたものだから、今夜は仇かたきを取られるんだよ。己はもうすつかりお嬢様に降参して

了つたんだよ。お前も早く詫あやまつて了わないと、非道い目に会わされる。……」

こう云う間も蠟の流れは遠慮なくだら／＼と蚯蚓みづずの這うように額から睫毛へ伝わって来るので、再び仙吉は眼をつぶって固くなつた。

「栄ちゃん、もう此れから信ちゃんの云う事なんぞ聴かないで、あたしの家来にならないか。いやだと云えば彼処にある人形のように、お前の体へ蛇を何匹でも巻き付かせるよ」

光子は始終底気味悪く笑いながら、金文字入りの洋書が一杯詰まつて居る書棚の上の石膏の像を指さした。恐る／＼額を上げて上眼づかいに薄暗い隅の方を見ると、筋骨逞しい裸体の巨漢うわばみが蟒に

巻き付かれて凄じい形相をして居る彫刻の傍に、例の青大将が二三匹大人しくとぐろを巻いて、香炉のように控えて居るが、恐ろしさが先に立って本物とも贋物とも見極めが付かない。

「何でもあたしの云う通りになるだろうね」

「……………」私は真つ蒼な顔をして、黙って頷いた。

「お前は先仙吉さつきと一緒にあたしを縁台の代りにしたから、今度はお前が燭台の代りにおなり」

忽ち光子は私を後手に縛り上げて仙吉の傍へ胡坐を搔かせ、両足くるぶしの踝を嚴重に括って、

「蠟燭を落さないように仰向いておいでよ」

と、額の真中へあかりをともした。私は声も立てられず、一生懸

命燈火を支えて切ない涙をぼろ／＼こぼして居るうちに、涙よりも熱い蠟の流れが眉間みげんを伝つてだら／＼垂れて来て眼も口も塞がれて了つたが、薄い眼瞼まぶたの皮膚を透して、ぼんやりと燈火ともしびのまた／＼のが見え、眼球の周囲がぼうツと紅く霞んで、光子の盛んな香水の匂いが雨のように顔へ降つた。

「二人共じつとそうやって、もう少し我慢をしておいで。今面白いものを聞かせて上げるから」

こう云つて、光子は何処かへ行つて了つたが、暫くすると、不意にあたりの寂寞を破つて、ひっそりとした隣の部屋から幽玄なピアノの響きが洩れて来た。

銀盤の上を玉あられの走るような、溪間たにまの清水が潺湲せんかんと苔の上

をしたゝるような不思議な響きは別世界の物の音のように私の耳に聞えて来る。額の蠟燭は大分短くなつたと見えて、熱い汗が蠟に交つてぽた／＼と流れ出す。隣りにすわつて居る仙吉の方を横目で微かに見ると、顔中へ饅頭粉うどんこに似た白い塊が二三分の厚さにこびり着いて盛り上り、牛蒡ごぼうの天ぷらのような姿をしている。丁度二人は「浮かれ胡弓こきゅう」の嘶の中の人間のように、微妙な楽の音に恍惚と耳を傾けた儘、いつまでもいつまでも眼瞼まぶたの裏の明るい世界を視詰めてすわつて居た。

其の明くる日から、私も仙吉も光子の前へ出ると猫のように大人しくなつて跪き、たま／＼信一が姉の言葉に逆おうとすると、忽



ち取つて抑えて、何の会えしやく釈もなくふん縛つたり撲つたりするの  
で、さしも傲慢な信一も、だん／＼日を経るに従つてすっかり姉  
の家来となり、家に居ても学校に居る時と同じように全く卑屈な  
意気地なしと變つて了つた。三人は何か新しく珍らしい遊戯の方  
法でも発見したように嬉々として光子の命令に服従し、「腰掛け  
におなり」と云えば直ぐ四つ這いになつて背を向けるし、「吐はい月  
峰ふきにおなり」と云えば直ちに畏まつて口を開く。次第に光子は増  
長して三人を奴隸の如く追い使い、湯上りの爪を切らせたり、鼻  
の穴の掃除を命じたり、Urineを飲ませたり、始終私達を側へ侍  
らせて、長く此の国の女王となつた。

西洋館へは其れ切り一度も行かなかつた。彼の青大将は果して本

物だか贗物だか、今考えて見てもよく判らない。

## 青空文庫情報

底本：「潤一郎ラビリンズ※」[#ローマ数字1、1-13-21]——初期短編集」中公文庫、中央公論社

1998（平成10）年5月18日初版発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第一巻」中央公論社

1981（昭和56）年5月25日

初出：「スバル」

1911（明治44）年6月1日

※底本は新字新仮名づかいです。なお旧字の混在は、底本通りです。

入力：砂場清隆

校正：門田裕志

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 少年

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>